



旭川大学 理事長・学長
山内 亮史

やまうち・りょうじ氏
1941年生まれ
1970年 北海道大学大学院教育学研究科博士課程
教育社会学専攻単位取得後退学
1970年 北日本学院大学女子短期大学部
(現:旭川大学短期大学部)専任講師
旭川大学経済学部助教授
1975年 旭川大学経済学部助教授
1987年 ヴィクトリア大学(ニュージーランド)
客員研究員
1990年 旭川大学経済学部教授
1998年 イギリスチェスター大学客員教授
2003年 旭川大学・旭川大学短期大学部学長
2004年 学校法人旭川大学理事長
専門は教育社会学、社会福祉論、地域政策論

公立化、総合大学化を経て「地域のダム」大学を目指す

本学の法人としてのルーツは、1898年(明治31年)旭川村に誕生した旭川裁縫専門学校に遡ります。その後いく度かの校名変更に伴う変遷はあったものの「女子教育」として地域に確固たる基盤を築きました。

1964年(昭和39年)には短期大学を設立し、1968年(昭和43年)には、旭川市の研究学園都市構想において、本学の前身である北日本学院大学を開学。いずれも経営的には挫折。抱えた負債は12億円。私は開学3年目、着任後にその事情を知りました。

正直なところ、退職することも考えました。しかし、働き続ける人達もいる。事務職員、図書館員、ボイラーマン…。その人達と共に再建の道を探るべきと思い直し、旭川市に直談判に行きました。市も理解を示し、損失補償の労をとってくれました。当時の五十嵐広三市長は、こう言いました。

「ひとつの大学づくりが、ひとつの街づくりにつながるような大学を、どうかつくりあげてください」

この言葉に深く感銘を受け、大学再建が私の使命と覚悟。そこから今日まで、私の人生は旭川大学と共にあります。

地域の各々の事情に寄り添う教育

その当時の北海道は、さながら東京の大手私大の植民地のごとく、各地に姉妹大学や短大が造られていきました。それを横目で見ながら、われわれは地域貢献を胸に刻み直しました。

「地域に根ざし、地域を拓き、地域に開かれた大学」
この建学の理念に基づき、地域密着型大学としての歩みを続けてきました。教育手法も、学生が地域に飛び込んでいって学び取ることを大切にしています。

例えば、経済学部の江口ゼミナールは、旭川名物のラーメンに着目。学生は、ラーメン店を一軒一軒訪問していきます。なぜラーメン店を始めたか、地元の食材を何割くらい使っているか、損益分岐点は何杯か、後継

者は育っているか——根掘り葉掘り聞いて、たまに店主に追い返される。大学に戻れば、今度は教授から「もう一回!」とはっぱを掛けられ、また出かける。こうしたやりとりで、学生は相当鍛えられます。江口ゼミは、「北海道・東北ブロック学生研究発表会」という文部科学省の事業で、並み居る国公立大学を抑え、2014年、2015年と2年連続で1位になりました。保健福祉学部も同様に、例えば過疎地に住まう一人暮らしの老人を訪ね、今どんな生活をしているのか、どんな課題を抱えているのかをヒアリングしていく。

どちらの学部もアプローチは同じです。地域において、それぞれの人や企業がどんな事情を抱えて生きているのか。それぞれの「事情」に寄り添わない限り、解決策も見いだせないことを、身をもって知ってもらうということです。

近年、本学は、こうした「教育力」が認められているとともに、「就職力」も評価されています。「旭大ナビ」というシステムが旭川市の約280社とつながっており、そこで学生と企業とのマッチングを実現しています。これが功を奏し、就職率の高さに加え、地元還元率も高く、およそ9割が旭川もしくは北海道内に就職しています。

公立化、総合大学化に向けて

地域貢献という点では、地域研究所を設置し、長年、市民向け講座を開いたり、教員が自治体の各種委員を務めてきました。ユニークなものとしては、2006年から始めた「君の椅子」プロジェクト。近隣6町村で生まれた赤ちゃんに「生まれてきてくれてありがとう。君の居場所はここにあるからね」の気持ちを込めて本学から椅子を贈るのですが、それが今年、累計1000脚に。サントリー地域文化賞を頂きました。

昨今、かつて北海道に進出してきた大手私大の多くが少子化のあおりを受け、続々と撤退しています。どれほどの理念と哲学をもってこの地にやって来たの

か、私は大きな疑問を感じています。

われわれは長年、「村を捨てる大学より、村を育てる大学になろう」を信条としてやってきました。こちらは当初、効率優先の有名大学とは違って、ゆっくりとしたペースで地域を守り育てる「1周遅れのトップランナー」でよいと思っていました。

ところが、「原発事故」という戦後教育に鋭く反省を強いる未曾有の事故を経た今、そしてまた、北海道から次々と引き上げていく大手のうしろ姿を見るにつけ、実はわれわれが「真のトップランナー」なのではないかと思えてきました。今こそ、命と人間への感受性を取り戻し、「地方創生」に意志を持って邁進する大学が必要に違いないからです。

現在、本学は「公立化」に向け、市と協議に入ったところ です。

北海道は今、札幌への一極集中が加速しています。就職や進学で転入する「社会増」が札幌市は全国1位。このままでは、札幌を除いた地域は、経済も医療も福祉も立ちゆかなくなってしまいます。そこで、旭川大学を公立化し、学部を増やして総合大学化し、「地域のダム」になっていくという構想を描き始めました。新学部としては、TPPの時代に地元農村が落ち込まないように、地場産業の6次産業化に貢献するような産業工芸系の学部を想定しています。

旭川空港は、中国や韓国、台湾への定期便があり、北のゲートウェイとしての役割を十分担えます。旭川市を中心とした50万市民がこの地で幸福に暮らし、再生産していき、成長なしでも豊かな気持ちですごしていける「定常型社会」。その中心に、新生旭川大学があるというのが、私の思い描く青写真です。

ところで、私は赤塚不二夫が大好きで、「これでいいのだ」というバカボンのパパの言葉は、いつも私を魔法のごとく救ってくれます。だから、私の合言葉はこうなのです。「村に帰ろう。これでいいのだ!」

